

## 普門寺からのお便り

ヨーロッパ国際布教師

大悲山普門寺アイゼンブッフ禅センター

中川 正壽

■平成二十四(二〇一三)年十二月

拝啓 本年も押し迫りました。ご清祥にお過ごしのことと存じます。

ここ一年身辺いろいろありました。日本の御寺院とは異なり、法の後継者がいないこの普門寺では来年より私がお寺部門一人となって生活する分、これまで育ててきたサンガのメンバーを盛り立てて、毎回の禅のコース、境内の野菜畑など二、三人ずつを当てる担当することになっています。メンバー自身での討議実行試行錯

誤となります。実際彼らがやらなければ人がいないのですから、みなもそろそろ来年からの新しい状況がわかってきたようで、よくなる方向は芽生えてきていますが、しかし私の舵取りが一番大切なところでしよう。その舵取りがまた私の一番苦手とするところでドイツ語習得と同じく見込みはありません。

グループが小さいものですから、私の人の良さでよきにつけ悪しきにつけ、こんな私から離れた者、いまだに信用してぴったりとついて来る者といういろいろある中で、サンガができてからは一層まとまるようになっていきます。典座、堂行、維那と順番に受け持っています。全体としては普門寺は新しい展開を必要としています。スタッフの代わりにセミナーハウス経営担当者を入れ、給料を払います。もつともその給料をその人が稼ぐわけですが、そして専門にセミナー部門を経営してもらいます。

これまでにここに来る者を将来普門寺を支えることのできる人物にしたいと努力してきましたが、彼らの必要とするもの、また体力、気力、素質、性格、育ってきた家庭事情などのいろいろな要素があつて、私の指導の下、本人たちは大いに充足を感じるようでしたが、私としては私一人ではこなしきれないジレンマを感じてきました。

ここに私の助手として先生格の者が二人ほどこいばまた違うでしょうが、日常彼らのために時間・エネルギーのほとんどを費やし、これらの若者がこれから先八年、十年とかかつて成長するかどうかを待つということになります。元々出家の志を立てたわけではない人たちなので、今後恋愛にしろ職場にしろ本人がその気になれば即刻出て行くというわけですから、私も六十六歳、この普門寺にいる私自身の五年先、十年先を考えて、今回長年の夢であつた若いス

タッフ三人を含む計四人の解散を宣言したことでした。

さてドイツは雪こそ少ないものの、夜は氷点下三度から八度ぐらいで日中も曇天の日が大半となります。私などには鬱陶しいことですが、それなりの味わいもあります。

この夏は普門寺単独主催邦楽コンサートを企画実行し、大変貴重な喜ばしい体験だった一方、こういうエンターテイメントの仕事の大変さを思い知らされました。日本から来られた御一行からは大変喜ばれ私どもに感謝されました。これも普門寺のスタッフの面々、サンガメンバーの協力、さらに通訳司会をしてくださった日本人女性や、その前にあつたミュンヘンでの独日協会、日本人会共催の折りにボランティアでご協力いただいた方々と数限りない方々の奉仕によつてできたことでした。詳しくはホームページをご覧ください。

来年一月早々より三月八日まで修行としてここを離れております。また四月の二十六日は宮崎禅師の七回忌でありますので永平寺に参りますが、四月前半はここで二つのコースを務めなければなりませんので、残念ながら予定されている妙元寺様の法要には随喜できません。どうぞよき新年をお迎えいただけますように祈念申し上げます。

合掌

中川正壽九拜

■平成二十五(二〇一三)年度報告

曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監部への年度報告

第一 普門寺における活動はプログラムの通り  
第二 普門寺主催になる邦楽コンサートを七月  
トラウンシュタイン市にて開催。

第三 ミュンヘン参禅会「正法会」を指導

第四

・四月 プラハにて講演と二日の参禅会

中部ドイツ、ホーフヘレンベルクにて

禅の講演

・五月 永平寺本山に安居した北海道の伝法智

道師が六月十九日まで当山にて研修

・六月 十八日より七月七日までサンガメンバ

ーの円光、慈光の二人を東京永見寺様

に袈裟把針習得のために派遣

・八月 ミュンヘン在住の庵下まゆみさんに御

来山いただき、一日懐石料理を指導し

ていただく

・十二月 二十六日より一月十一日まで本山派

遣留学僧 壽山俊道師が当山にて研修

第五 五月と九月にミュンヘン・ウエストパル

クのネパール・パゴーデにて禅の講演

第六 キリスト教系メデイーションセンター

としてドイツ随一の規模を誇るベネディクトゥスホーフにおいて十月十一日より十三日の間「スピリチュアリティと科学」のタイトルのもとに大がかりなシンポジウムが開催されたが、中川は参禅指導と三十分の講演を担当。講演者、参加者ともに大学関係者、医療関係者、哲学者、心理学者、心理治療家、禅の実践者が多かった。

本年は邦楽コンサートが普門寺主催による一大イベントであった。普門寺は本来日本伝統文化の紹介と支援も活動の一部としているので、四月二十八日の春祭りの折には、ミュンヘンに拠点を置く和太鼓グループ「黒竜太鼓」を招聘したが、コンサートは尺八奏者三人、長唄唄方三人、三味線方三人であり、三つの会場でコンサートを催し、普門寺が裏方一切をお世話した。滞りのない運びと大盛況に喜ばれ感謝されたが、日本への対応は中川一人で務めたので、禅

センターとしてこうした催しを主催することの限界を感じた。

来年より待望の袈裟把針の「福田会」が発足する。過去幾たびとなく日本より来ていただいた指導を受けてきたが、その度ごとに習ったドイツ人が日本へ行くなどして定着しなかった。今度は普門寺近在のサンガメンバーが習ったので定着発展するだろう。

来年は特にサンガの自主性とそれなりの活躍が期待される。

以上

■ EISENBUCH アイゼンブッフ

「愛禪佛府」……アイゼンブッフ

「禪を愛する仏たちのすまい」

「府」には「貴人の邸宅。屋敷。住まい」の意味があります。

「愛禪」とは禪を愛する、つまり禪を行すること。

「佛」とは道元禪師の著書『正法眼蔵』の中の「行佛威儀」の巻に以下のごとく示されています。

※諸佛かならず威儀を行す、これ行佛なり。

※佛向上の道に行履を通達せること、唯行佛のみなり。

※しるべし、生死は佛道の行履なり、生死は佛家の調度なり。

※了生達死の大道すでに豁達するに、ふるくよりの道取あり。

大聖は生死を心にまかす。この宗旨あらはるる、古今の時にあらずといへども、行佛の威儀忽爾として行盡するなり。道環として生死身心の宗旨、すみやかに辨肯するなり。

さらに『正法眼蔵』「生死」の巻にはこのように教えられています。

※ただわが身をも心をもはなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもつひやさずして、生死をはなれ、佛となる。

「愛禪佛府」における「佛」とはこの意味における「佛」であり、「行佛」です。その「仏たちのすまい」、つまり「道場」がこの「アイゼンブッフ」です。

